

# 2

第2章

## にんげん ころろ はたら 人間の心の働き

わたし 私たちはどのようにものごとを認識し、感じ、個性を発揮しながら発達していくのだろうか。私たちが普段の生活の中で何げなくおこなっている行動の背後には、ある一定の心の働きがあり、また、その中にも多様な個性がある。ここでは心の働きに注目しながら、私たちが他者とともどのように生きていくべきなのかを学んでいこう。

### 1 認知

★人間の思考と行動をささえる心の働きとはどのようなものだろうか。

#### 認知活動と知覚

私たちは普段の生活の中で、見る、聞く、覚える、考えるといった複雑な認知活動をおこなっている。

認知とは、私たちの思考や行動をささえる心の働きである。例えば、本を読むときには、目で見て文字の形を知覚し、その形を記憶と照らしあわせ、単語と文章の意味を理解し、さらにそこから考えたり記憶に情報をたくわえたりという一連の働きが必要となる。本を読むといった何げない行為も、このような複数の認知活動にささえられているのである。

視覚や聴覚、嗅覚、触覚などの知覚とは、身のまわりの情報を把握することである。目や耳などの感覚器官でとらえた情報は、脳を通して知覚される。そこには一定の法則があり、例えば、ものの形を知覚するときには、対象となるまとまり(図)を周囲の背景(地)からとり出すことで認識する。私たちが知覚する世界は、認知活動の中で自動的に解釈されたものである。そのため知覚された世界は、必ずしも実際の物理的な世界と同じではない。錯視のように、同じ図形を見ても周囲の情報によって知覚にずれが生じることがある。

#### 学習の法則

私たちはものごとを知覚するだけでなく、そこから多くのことを学習する。レモンや梅干しを食べたことがある人は、それらを目にするだけで、自然と口の中に唾液が出てくることだろう。これは、酸っぱい食べ物を食べたときに唾液が分泌されるという反射が、レモンや梅干しの映像だけで生じるように学習されたことを意味する。このような、生まれながらにも反射が別の刺激でも生じるように学習されることを古典的条件づけという。また、あるものを食べたあとの試合でたまたま活躍